
白い森

並盛りライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白い森

【Nコード】

N5657C

【作者名】

並盛りライス

【あらすじ】

ガルグイユの石柱の乱立する森が魅せる不思議な幻想で、私は奇妙な世界に迷い込んだ。

迷い込んだのは砂金の採れる白い森。

ガルグイユの石柱が到る所に朽ちていて、文明の栄光と衰退を象徴しているかのようで、ふと思えば見慣れた教室のようでもある。

木材で構成される机が規則正しく並んでいて、時々花が飾られる。押しつぶされそうな圧迫と緊縛。

その中で少年たちがダンスを踊る。

みんな異様に白い肌をしていて、同じように小さな手のひらを持っている。

その中で私だけが、傍観者で、

「うるさい、ガキは失せろ」

と叫ぶ。

少年たちはクスクスと笑う。

首を傾げたり、こちらの眼を必死に覗こうとする。

すべてを見透かされそうで怖くなった私が嫌がる仕草を、まるで楽しむかのように笑う。

すると急に手足が縮み、教室が大きくなっていく。

私の身長は少年と同じになり

高等部の制服の中に埋もれる。

少年たちは、狂喜して私を取り囲む。

私はもはや傍観者では無くなっている。

「カヨちゃん見つけ、どこに行ってたの？探したのにさ」

「えっとカヨは……」

と舌つたらずな声になり、それが嫌で黙る。

少年たちは無秩序に騒ぐ。笑う。

私はさっきまでの自信を失い泣きそうになり恐怖する。

誰かが誰かの花瓶を落として割る。呼応するように他の花瓶が割れる。

私は耳を塞いで無力にしゃがみ込む。

少年たちはいつの間にか高校のクラスメートになっている

私はもう見上げても見えない彼らの顔を窺って瞳を覗こうとして
いる

初等部の制服は体にぴったりと張り付いていて、不快感につつま
れている

教室の窓は割れていて、冷たい風が吹き込む。

まるで私など見えていないかのように彼らは振舞う。

きつと教室を間違ったのだ。私の居場所はここじゃない。

名札の初等部1なん7くみの横に私の名前を確認する。

7くみなんてあったか？記憶は曖昧になる。

ガルグイユの見せる幻想。

さらに奥に迷いこめば二度と帰れないかもしれない。

感触だけを頼りにして、出口を探り当てる。

鈍く音を立てて、ある筈のない石柱が倒れる。

夜と夜の間を一瞬に抜ける。思い出せ。

私は高等部を卒業した。

初等部は4くみまでしかない。

私は力ヨではない。

傍を何かが通った気がした。

白い、まっ白い何か。

私は森を抜けていた、朝日が折り重なって倒れそうに注ぎ込む。
振り返ってみると、それはただの白い森だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5657c/>

白い森

2010年10月19日11時49分発行